

一步踏み出す勇気だけあれば

ある夏の日、私は一軒のお宅の外構工事を請け負い、4日ほど通うことになりました。施主の奥様は、お一人で三人の息子さんを育てておられました。その中の一番下の息子さんが、高校一年の夏から学校に行けなくなり、3年ほど家に引きこもっているという話を聞きました。

仕事をしている間も、そのことが気になって仕方ありませんでした。夕方、作業を終えた帰り際、私は思い切ってその子の部屋のドアをノックしました。「おい、ちょっと出てこいよ」。しかし、ドアは開くことなく、静まり返ったままでした。次の日も、その次の日も、私は同じように声をかけましたが、返事はありません。そして最終日、私は少し強い口調で言いました。

「出てこなければ、壊してでも開けるぞ」。その瞬間、ゆっくりとドアが開き、彼が姿を現しました。長い間、人との関わりを絶っていたであろう彼の目は、不安と戸惑いで揺れていました。私はただ一言、「明日から、うちの会社で働け」そう伝えました。彼は何も答えませんでした。私は翌朝、彼の家の前に車を停めました。

初めは嫌がる彼を半ば強引に車に乗せ、現場へと連れて行きました。重い材料を運ぶことも、慣れない作業も、最初はうまくいきません。それでも毎日、少しずつ彼は人の輪に加わり、手を動かすようになりました。

20日ほど経った頃、私は何気なく尋ねました。「ところで、お前、夕飯はどこで食べている?」、「部屋で一人です」。「そうか。今夜から家族と一緒に食べる。できないなら、明日から来なくていい」。その言葉を残し、私は家に帰りました。

その夜、彼の母親から一本の電話がありました。「今夜、3年ぶりに家族4人で食卓を囲みました。本当にありがとうございます」。涙ぐむ声の向こうに、母親の喜びと安堵が伝わってきて、胸が熱くなりました。

翌朝、彼は少し照れたように言いました。「ありがとうございます。これからも頑張ります」。それから彼は、毎日まじめに働き続けています。現場でも笑顔が増え、仲間と冗談を言い合う姿も見られるようになりました。

ある日、ふと彼が言いました。「あの時、部屋から出してもらわなかったら、きっと一生、あのままだったと思います。自分がどれだけ損な生き方をしていたのか、今ようやくわかりました」。

私はその言葉を聞いて、胸の奥がじんと熱くなりました。彼を救ったのは、私ではありません。勇気を出して自分の足で一步を踏み出した、彼自身なのです。

人は、ほんの小さなきっかけで変わることができるのです。誰かの心に灯をともすことができたなら・・・そのお役に立てたかもしれないこと、そして、何よりも、彼自身が職を得て仲間ができたことで生き活きと人生を楽しめるようになったこと、私は、そのことが何よりも嬉しいのです。